

若い川の流れ

石坂洋次郎

角川書店

昭和三十三年十一月十日 初版発行
昭和三十三年十一月三十日 三版発行

若い川の流れ

定価 二百六十円

著者

石坂洋次郎

発行者

角川源義

印刷者

中内あき子

製本者

鈴木俊一

発行所

株式会社 角川書店

中光印刷株式会社 鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替えいたします

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京 一九五二〇八番

若い川の流れ

装
幀
森
田
元
子

第一景

六月の第三土曜日であった。

十一時半になると、K金属会社の建物の中は急に騒々しくなった。みんな帰り仕度をはじめたのである。

男の社員達は掛時計をチョイチョイ見上げ、煙草を吹かしながら、何かしゃべっているし、女の社員達は、代り番に化粧室に入って顔を直していた。

入社二年の曾根健助は、庶務課の自分のテーブルに坐って、その日の新聞をのぞいていた。空が晴れわたって、初夏の爽やかな微風が吹きめぐるっている土曜日の午

後、このまま下宿に帰るのもつまらないので、何か面白そうな映画かスポーツでも
と思って、それを探していたのである。

「何かあって……？ 私も連れて行ってもらいたいわ」

近くに席をもっている北岡みさ子が寄って来て、健助の肩の上から、一所に新聞
をのぞきこんだ。いまふりかけて来たらしい香水の匂いが漂たよっていた。

「いえ、ただのぞいていただけです。べつに行くつもりはないんです……」

「そう。……曾根さんは、女の子につき合いがわるいって、評判がよくないわよ。
みんな、誰かい人があるんでしょ」と云ってるわ」

「いや。そんなことはありません。……ただ僕は、女の人と遊ぶのが苦手なもん
だから……」

「女を差別まべつたいぐう待遇するなんて古くさいわよ。貴方、心の中で、すぐセックスにこだ
わるんでしょ……」

「僕は、女の人を、女以外のものに見ることが出来ないんです……」

「当り前のことじゃないの。困った人ねえ……」

口では困ったというが、北岡みさ子は、好意に満ちた微笑を湛^{たた}えて、健助の横顔を眺めた。

やせぎすで背が高いみさ子の顔立ちは、涼しげな大きい目とうすい唇、ゆたかな耳たぶと細い鼻柱といったぐあいに、対照的な造作で、魅力ある調和を保っていた。性格もサバサバしており、そんなところを買われて、社員の組合の女子部の副委員長をしていた。年齢は健助と同じで、二十四歳だが、社員としては一年先輩^{せんぱい}で、ふだんから何かと健助に親切にしてくれていたのである。

「……すみません。つき合いがわるくって……」

「ほんとよ。わたし、みんなに、貴方を口説^{くど}きおとして仲間^ひに曳^ひっぱってくれて頼まれてるんだわ。貴方、見かけがいいし、どこか男らしいし、女の子にとて

も人気があるのよ。……一つだけお尋ねしますけどね。曾根さんは、どんな形式の結婚をなさるつもり——？」

「僕は見合結婚をするつもりです」

と、健作はすなおな調子で答えた。それからあわててつけ加えた。

「自分だけで女の人を見合わせる自信がありませんから……」

みさ子は、指先きをパチンと鳴らして、顔を大げさにしかめ、

「呆れたわ！……貴方は見かけ倒しなのね。のっぽで、いい恰好かつこうの身体からだつきをして、顔だって物の分った風をしているくせに、頭の中には、明治時代のカビくさい思想を宿しているのね……。しっかりしてよ。一人前の男が、自分のお嫁さんを他人に世話してもらうなんて、恥ずかしいことだと思わないんですか。自主独立の精神で、自分の身の始末をしていけないものではないかねえ……」

「すみません」

と、健助はニヤニヤしながら云った。

「若い男の人が、そんな古くさい考え方をしていると、私たち女性の方でも、そのおつき合いさせられるんですからね。はた迷惑だわ……」

「北岡さんは、自分の目だけで、男性の人柄を見わかる自信があるんですか？」

「そうきかれると、ちょっとたよりなくなるわね。でも、私、いまのいままで、

貴方が見合い結婚を希^{のぞ}んでいる男性だとは思ってませんでしたわ。二年間も机を並べて、貴方を見ていたくせにね。……もっと敲^{たた}けば、貴方の中からは、もっといやらしい音^{おと}が出て来そうですわね。それを私は、貴方のハンサムな見かけに欺^{だま}されて、貴方はなかみまでスッキリした方だと思っていたんです……」

「そのとおり、おたがい、異性の中身は、なかなか見通せないものですよ。どうです、貴女も見合い結婚に宗旨^{しゅうし}を変えられたらいかがです……」

「ぶつわよ！」

北岡みさ子は、ぶつ代りに、健助の肩に手をのせて軽く揺すぶった。

「皮肉だけは一人前に云えるんだから、憎らしいわ。……まあ、いいわ。考えようでは、貴方がそんなに女を敬遠するのは、貴方の周囲にいる私達に、貴方を、狭いカラからひっぱり出す魅力がないということにもなるんでしょうから……。もし、何かで、貴方の思想が変ることがあったら、私達と遊んで下さいね……。あつ、そうだわ、忘れてた……。さっき専務さんに廊下で会ったら、貴方に、帰る前に専務室に寄ってくれて云ってましたわ。何か頼みたいことがあるんだって……」

「僕に……。何だろうな」

「すぐいらっしゃいよ。お昼になるわ」

「ああ」

健助は、上衣に腕を通し、蝶ネクタイの曲りを直して、廊下のつき当りにある専務室の前に行き、ドアをノックした。

「お入り」

白いもののまじった豊かな髪をきれいに分け、健康そうなあから顔をした川崎専務は、スポーツシャツに着かえて、廻転椅子^{かいてんいす}をギイギイさせながら、若い社員達以上^{じやうじやう}に腰の浮いた感じで坐っていた。テーブルの上には、ゴルフのクラブが一本のつており、これからゴルフ場へ出かけるつもりらしい。

「遅くなりました。どんな御用でしようか？」

「君、これからまっすぐ下宿に帰るのかね。それともどこかへまわるのかね」

「べつに……。プロ野球のいいカードがあればと思ったんですが、今日のは大したこともないようで……。下宿に帰って、庭の手入れでもしようかと思ってたんです……」

「そうか。それだったら、お気の毒だが、途中T駅で下りて、儂^{わし}の家にこの包みを届けてもらいたいんだ。儂には大切なものだから、必ず、家内か、家内が不在だ

「たら娘に手渡してもらいたいんだ……」

川崎専務は、テーブルの端にのっている四角な紙包をとって、健助の方に差しのべた。

「はあ。では、お届け致します」

「すまん。……君、土曜日の午後だというのに、デートでもしてるんじゃないのかい？」

「いえ。僕はそんな趣味しゅみがないんです。一人の方が……あるいは男同士の方が、気楽なものですから……」

「ハハハ。……儂等わしらの年齢になると、君の云う通りなんだが、君のような若さで、よくそれで通していかれるな。若い女の子をきれいだと思わんのかい？」

「思いますか……思うだけで、それ以上のことは大儀たいぎなんです」

「若い男がみんなそう怠け者じゃ、若い女の子が失望するだろうね。女の子は、

男がみんな適当にオオカミであることを希んでいるものなんだ」

川崎専務が、北岡みさ子と同じことを云うので、健助はふと可笑しくなった。

「まあ、いいさ。今日はとりあえず、この品物を届けてくれ給え。家内か娘に手渡すのを忘れないでな……。地図は名刺の裏にかいてあるから……」

「それではたしかに——」

と、健助は、四角な紙包を大切に抱えて、専務室を出た。

川崎専務は、会社の往復には自動車を使っていたが、どうかすると東横線の電車を利用することもあり、健助はときどき電車の中で顔を合せることがあった。すると、川崎専務は、自分の方から気さくに傍に寄って来て、健助になにやかやと話しかけた。健助とかぎらず、会社にいる時の様子をみても、若い者と話をするのが気分的に好きなようだった。また、若い社員達も、物分りがよくて実行力のある川崎専務を、重役の中では一ばん信頼していたのである。

もちろん、川崎専務と曾根健助は、世間普通の重役と新米社員の関係だけで、それ以上の特別な交わりがあるわけではなかったが、しかし健助は、ふだんに信頼している上役から、個人的な用事を頼まれたということで、なんとなくいい気分になっていた……。

往来に出ると、陽がカンカンに照っており、眩^{まぶ}しいほどに明るかった。並木の柳の枝が、微風に吹かれて、爽^{さわ}やかにそよいでいた。勤め帰りの女達は、もう半袖の夏の軽装をしている者が多く、見るからに涼しげだった。

「曾根さん、お帰り？……なあに、その大きな箱は——？」

横を歩いていた四、五人の女連れのグループの中から、北岡みさ子が寄って来て、健助に話しかけた。

「やあ。……専務さんに、これ、自宅に届けてくれて頼まれて、やっぱり僕、おつき合い出来ませんでしたよ」

「そう」

と、みさ子は手をのばして、健助の抱えている荷物にさわり、妙な微笑を浮べて、
「何でしょう。固い、わりと重いものだわ。千円紙幣きつの束かも知れないから、大切に
もっていらっしゃい。……私達、暑いもんだから、そのビヤホールでビール
を飲んでいきましょって、話がきまったとこなの。貴方を誘いはしないわ。……
川崎専務の奥さまって、御自分もきれいだし、万事にきれいな方ですから、貴
方も形を崩くずしてはだめよ。どれ、私がみて上げる……」

みさ子は、健助の腕をつかんで身体をまわすようにしながら、身なりを点検てんけんし、
「まあ、辛うじて及第だわ。……奥さんの前で、さっきのような古くさいことを
云うと、愛想あいそをつかれますから、あまり混み入ったお話をしない方がいいわ」

「御忠告ありがとうございます……」

健助は、北岡みさ子や彼女の仲間のくすぐったそうな笑顔に見送られて、足を早

めて地下鉄の入口に急いだ。

渋谷で東横線に乗り換えて、T駅で下りると、健助は地図を頼りに、ゆるい坂道をのぼって、閑静な住宅街の一面に出た。

川崎専務の家は、角屋敷になっており、大谷石を積んだ上に土を盛って、じんちゅうげやつつじを植えた垣根が、ひろい屋敷を囲んでいた。屋敷の中にも緑の樹木が多く、街なかとちがって、ここらでは空気まで甘いように感じられる。

健助は、みさ子の言葉を思い出し、ネクタイや上衣の工合を直してから、玄關の呼鈴を押した。と、四十年配の女中が出て来て、健助が用件を云うと、

「奥さまはさきほどお出かけですけど、お嬢さまでしたらいらっしゃいますから……。ちょっとお待ち下さいまし……」

健助は、ここに来るまで、川崎専務の夫人が留守だということは考えてなかった。ので、また苦手の若い娘にものを云うのかと思うと、少しばかり気が重くなった。